

# 戦国小松を旅した人々



本折町現風景 中世の本折は加賀絹と呼ばれた絹織物の産地で、南加賀の流通の拠点であった。近世まで本折とは、通称橋南地域全体をさした。

中世の南加賀を往来する街道には、海岸沿いを走る浜通り道と、内陸の平野部を通る中通り道があった。柴山・

今江・木場潟の間を抜け、加賀絹の産地であった本折にいたる中通り道は、

主要な街道として、記録にのこるようになる。みずから旅して記録した人物に、『聖護院道興(廻国雜記)』と冷泉為広(冷泉為広卿越後下向日記)がいる。

聖護院門跡の道興は、文明十八年(一四八六)六月関東・東北に向う途次に訪れた。越前から加賀に入り、橘・敷地・弓波・動橋をへて本折に着くと、絹を織る人を見て和歌を詠んだ。

たれかもとをりそめつらんよろこびをくわふる国のきぬのたてぬき

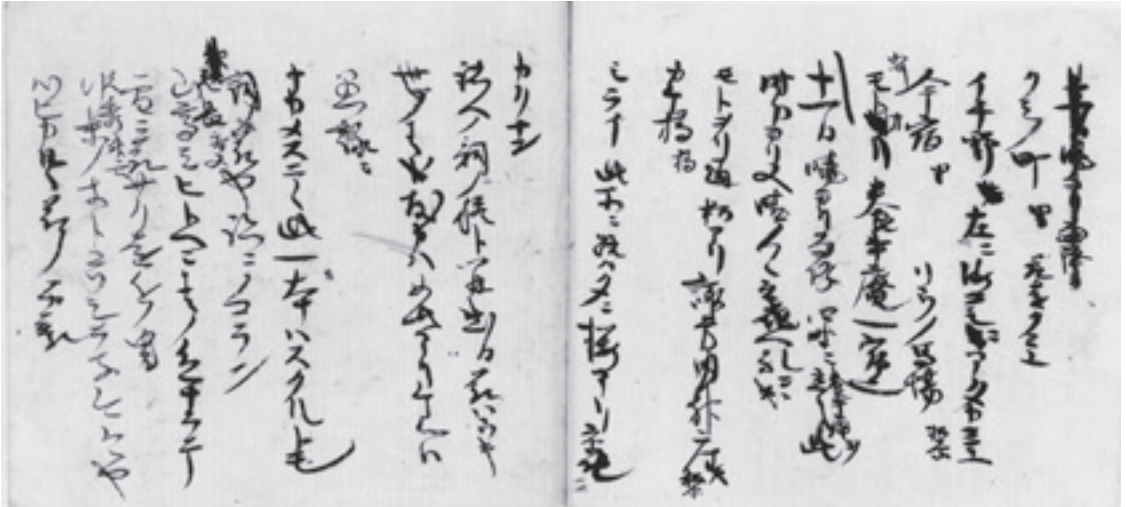
次いで汐こしの松を尋ね、中通り道を東に折れ、仏の原から白山に向かった。

冷泉為広は、延徳三年(一四九二)三



天文15年(1546)5月16日 室町幕府奉公人奉書(京都大学総合博物館所蔵) 中通り道の矢田から串付近に所在した公家の中院家領額田荘(小松市額見町を遺称地とする)をめぐる文書。戦国時代、中院家の当主が在荘して経営に当たった。彼らも旅する人々であった。

月、越後に下向する管領細川政元一行に加わり通過した。十日に吉崎坊を出立し、やがて右に津波倉を見遣りながら弓波をへて、動橋から高塚・矢田・串の町に入り、イチ野・今宿・龍ノ



冷泉為広卿越後下向日記(冷泉家時雨亭文庫所蔵) 延徳3年3月11日条 為広は細川政元と親交があり、そのため越後の下向に同道したのである。本日記はこの際に自筆で記録や詠草の草稿、雑記を記したものの。



歴史の道調査報告書第1集『北陸道(北国街道)』(1994年)より

馬場から本折養牛庵で一宿した。翌十一日は諏訪明神の社叢を見ながら梯川に架かる梯橋を渡り、白江の桜をながめて一首を詠んだ。

ながめすてて此一本はすぐるとも  
詞の花や跡にのこらん

さらに開発から浜通り道へと進んだ。

帰途は四月十九日野々市から安宅に入り、聖興寺で一泊し、浜通り道を進んでいる。

道興・冷泉為広の歩んだ本折の繁栄が、中通り道を盛んにしたのであった。さらに養牛庵・諏訪明神という寺社に参詣を呼び、白山に人々を向かわせたのである。

(木越祐馨)